

## 「第3回手取川懇談会」の懇談結果(要旨)

○開催日時:平成20年11月28日(金) 9:30~11:30

○場 所:金沢河川国道事務所 2F会議室

○議事次第

1. 開会挨拶(蓮見事務所長)
2. 出席者紹介(畠中副所長)
3. 懇談内容
  - (1)手取川の流況
  - (2)手取川・梯川連合水防演習
  - (3)手取川河川改修事業 急流河川対策
  - (4)自然再生事業(石の河原の再生)について
  - (5)自然再生基礎調査について
  - (6)試験フラッシュについて
  - (7)川で学ぼう
4. 閉会挨拶(蓮見事務所長)

○出席者名簿

◇出席者:13名(敬称略・専門分野別五十音順)

氏 名	専門分野	所 属
玉井 信行	河川工学	金沢学院大学大学院 教授
佐野 修	自然環境(魚介類)	石川県立自然史資料館
富樫 一次	自然環境(昆虫類)	石川県ふれあい昆虫館 前館長
中村 浩二	自然環境(生態学)	金沢大学自然計測応用研究センター 教授
野崎 英吉	自然環境(哺乳類)	石川県環境部自然保護課 参事
古池 博	自然環境(植 物)	石川県自然史センター 専務理事
中川 耕二	地下水・地質	北陸地盤工学研究会 前会長
藤 則雄	地下水・地質	金沢大学 名誉教授
村島 和男	農業水利	石川県立大学 教授
宮崎 光二	内水面漁業	石川県内水面漁場管理委員会 会長
永井 隆一	地域社会	白山市地域振興公社理事長、石川県砂防協会前会
長谷川孝徳	歴史・文化・文芸・教育	北陸大学未来創造学部 教授
三田 薫子	歴史・文化・文芸・教育	作 家

◇欠席者

辻本 哲郎	河川工学	名古屋大学大学院 教授
西田 耕豊	地域社会	石川県治水協会会長、川北町長
池本 良子	水 質	金沢大学理工研究域環境デザイン学系 教授
高澤 基	報 道	北國新聞社 代表取締役専務
小堀 幸穂	地域経済	鶴来商工会 副会長
平野 俊也	歴史・文化・文芸・教育	水辺の楽校推進協議会委員長、能美市立寺井図書
米田 満	歴史・文化・文芸・教育	白山地域自然保護懇話会 座長

## ○懇談要旨

(玉井氏)

水防に関しては、住民の方々に関心もってもらうことが重要で、水防工法のコンテストを催すなど工夫をこらして、水防の大切さを学んでもらえれば、興味を持ってもらえるのではないかと。

(三田氏)

7月28日に浅野川の大水害を引き起こしたゲリラ豪雨など、最近の洪水は予測が難しい。ダムが出来て以来、わたしたち住民は河川からの恩恵を受けたことを忘れ、安心高枕となり、水害に備える心構えが希薄になってきた、今再び河川に関心を持つように情報提供し、さらに住民のから情報を提供してもらおうようなシステムを作っていく必要がある。従来に引き続き人と川がコンタクトをとる仕掛け作りをお願いしたい。

(事務局)

情報発信は重要だと考えており、様々な行事等を通じて多くの人々と接し、地域の方々に治水に関する関心をより持っていただくこと、インターネットなどで情報を配信していることをより知っていただくことなど、地道な活動を続けていきたい。

また、ゲリラ豪雨に対応するための新型レーダーを活用したシステムの検討を進めており、より精度の高い情報提供にも努めていく。

(藤氏)

自治体でハザードマップが整備されてきているが、町内会レベルや学校レベルで関心が低く活用もされていない状態が多いように見受けられる。ハザードマップなどはそれを有効に活用していくためにも自治体と協働して住民への周知を図ることが必要である。

(村島氏)

「手取川・梯川連合水防演習」は、当日雨が降っていたこともあり盛り上がり欠けていたような気がする。各展示ブースでの説明も不十分に感じた。水防訓練はこのようにセレモニー的に実施するのではなく、もう少しスマートな形で自治体単位の実践的な訓練が大事だと思っている。

(事務局)

連合水防演習は北陸地方整備局内で持ち回りで実施している。当事務所独自では石川県内の自治体や消防団を対象に、水防工法の訓練や技術の伝承を目的とした実践的な訓練として、水防工法研究会を毎年実施している。

(永井氏)

市町村単位では、毎年その自治体の地域性を活かした訓練を実施している。

(古池氏)

岩盤が出ている河床形態は白山合口堰堤上流で見られる環境であり、天狗橋上流の当該事業区間は砂礫流出にともなって、上流域の環境が下流に降りてきた状態で、河川環境からすれば多様性が出てきているものだと考えている。この計画は研究不足で石の河原を再生する事業の成功は難しいと思われる。当該区間を石の河原に再生するよりも、石の河原の岩盤河床化が下流の方へ進行することを防ぐ方向で考えた方が良いのではないかと。

(中川氏)

水制工に使用する礫はどこから持ってくるのか、また施工する見込みはあるのか。さらに石の河原の復元が仮に成功したとしても、この区間で土砂を補足することにより、下流部の河床低下が起こるのではないか。天狗橋の下流部でも砂礫がなく岩盤がでて来ている状態であるため石の河原再生は天狗橋の上下流で考えた方が良いのではないか。

(事務局)

水制工に使用する礫は、手取川の上流から持ってくることを考えている。また、土砂の補足については、現状で手取川の流下土砂量は少ないと考えられ、場合によっては人為的に砂礫を入れる必要も出てくると考えている。天狗橋の上下流については、今回の試験施工の結果を見たのち地域の方々のご意見も踏まえ検討していきたい。

また、石の河原の再生については、岩の出ているところ全てを実施することは考えていない。まず少し試験的に手をつけて様子を見て評価をいただきながら進めていきたいと考えている。

(玉井氏)

手取川では、自然再生事業に関連して多面的なことを精力的に実施しているが、自然再生を進める上では河川の上流から下流までの全体のデザインをした上での位置づけを整理する必要がある。また砂礫を自然に補足することが難しくよそから持ってくるのであれば、海岸での養浜のような表現を使った方が計画の全体像が掴みやすいのではないか。

(三田氏)

石の河原再生に使う石は上流からもってくるとのことだが、海外などから持ってくると外来種が入ってくるなどの問題が生じると思われる。また、鳥類なども自然再生に対象になっているようだが、手取川は魚のいる川にしてほしい。

(藤氏)

今回実施した試験フラッシュは非常に興味深い調査だと思われる。以前に海岸の粒径を手取川から千里浜まで調査したことがあるが、手取川から千里浜に向かって粒径が徐々に細かくなっており、手取川の土砂が千里浜までとどいていると考えている。このような土砂の動きは明らかになっているのか。また、近年、手取川ダムや砂防施設などの影響で千里浜の汀線後退が問題もあり、砂礫の動きについて継続的に調査してほしい。

(事務局)

手取川の土砂と海岸の砂浜の関係については、明らかになっていない。しかし、空中写真などにより昭和 22 年からの砂浜の侵食状況を整理しているが、ダム建設のインパクトによる砂浜侵食傾向の変化は見られない。試験フラッシュについては、砂浜の形成に寄与できるかも含めて実施している。

(古池氏)

土砂移動の調査は、試験フラッシュのような実験だけではなく、洪水の度に砂堆がどのように変化しているかなど、生のデータも把握し総合的に整理していくことが重要である。

(中村氏)

生物は選択的に生息環境を移動していくものであり、石の河原環境も直轄管理区間に

限定せず、上流の方も含めて状態を把握しておくことが重要である。

(三田氏)

アウトドア教室の説明で、学習の要素が少なかったという記載があったが、子供たちは遊びも含めた様々な状況で学んでいる。成果のほどは、のちに必ず現れる。行うことこそ意義がある。このため学習の要素が少なかったという表現はひかえた方が良い。

(長谷川氏)

アウトドア教室のアンケートの評価として、その場所に以前に来たことがあるのか、その子の生活圏がどこなのかを調べて評価した方が良い。

(藤氏)

小学校の授業時間が減っている中で、理科や社会系の授業時間が削られている。このため、このような総合学習の支援は重要なことであり、是非継続して根強く実施してほしい。

(富樫氏)

減少している生物がどのような環境に生息しているのかを、子供たちに教えていくことが重要である。

(永井氏)

アウトドア教室などはやり方次第で良いものとなり得る。どこでもそうだが指導者次第であるため、指導する職員がセミナーなどで研修してはどうか。